

【調査事例②】

若者や外国人が行き交う街だからこそ知ってほしい、

授乳中の母親が外に出るきっかけを作る授乳服のブランド

「MO-HOUSE（モーハウス）」

妊娠しても、子育て中でも、いつも自分らしい生き生きしたライフスタイルを楽しんで欲しい。そんなメッセージを掲げる有限会社モーハウスは、授乳服や授乳用インナーの制作・販売を手がけている。

自身の体験をきっかけに、代表の光畑由佳さんが自宅で作くり始めた授乳服。2005年に渋谷区・青山に実店舗をオープンしてからは、中小企業庁長官賞やグッドデザイン賞をはじめ、さまざまな賞を毎年のように獲得している。

たかが授乳、と思うかもしれない。しかし、そこには子育てを経験した者にしかわからない苦悩がある。光畑さんがママたちと目指したのは、つらいと思われがちな子育てを楽しい子育てに変える授乳服だ。

社会に出られる子育てスタイルを発信する



有限会社モーハウス 代表取締役 光畑由佳さん

——授乳服を手がけるようになったのは「中央線事件」がきっかけと伺いました。

およそ20年前のことです。3歳と生後1カ月の子ども2人を連れて、JR中央線に乗っていたんです。すると、下の子が泣き出してしまって。「迷惑だから泣き止ませないと」というプレッシャーから仕方なく車内で胸を出してお乳をあげたのですが、周りの人の好奇や戸惑いを含んだ視線を浴び、恥ずかしさや腹立たしさなどのいろいろな負の感情に襲われたんです。

人前での授乳がこんなにたいへんだなんて。お母さんが家に閉じこもりがちになってしまうのは、こういう体験をしたくないからだと身をもってわかりました。もっとあたりまえに赤ちゃんを外に出られるようにできないか。そんな思いから授乳服をつくり始めたんです。

—お店をやりたい気持ちは昔からあったのですか？

オーナーや洋服屋さんへの憧れは特になかったですね。お茶の水女子大で衣服環境を学んだあとに、渋谷・パルコの美術企画や建築雑誌の編集をしていたこともあって、「情報をお伝えしたい」という思いはありました。

子育ては苦勞と引き換えではないし、ひとりぼっちでやらなきゃいけないものではありません。うちには、赤ちゃんを抱っこしながら仕事をするスタッフが大勢います。「子どもを産んでも、おっぱいをあげながら働くことができるライフスタイルは存在するんだよ」って発信するためにお店をやっています。

—会社を切り盛りしながら子育てする道を選ばれた。

兼業や副業、フリーランスを経験して思うのは、育児をしながら働くには起業が一番楽なんです。覚悟がいりますし大変ですけど、会社に勤めて、保育園のお迎えに間に合うように走って、環境にコントロールされながら生きるより、全部自分でハンドリングできる方がずっと開放的だと思います。そもそも、会社で働いていたときは、子どもができたら仕事人生は終わりだと思い込んでいたんですけどね。会社を起こしてから、もう 20 年も経ってしまいました。

妥協しない機能性を、罪悪感に苛まれない金額で



機能性やデザインにこだわりつつも、お母さんたちが罪悪感を感じない価格に抑えている

—授乳服は、ビジュアルよりも機能優先なのかと思っていました。でも、素敵なデザインがたくさんあるんですね。

うちのスタッフはほぼ授乳服ユーザーなので、実際に着て授乳してもらって、彼女たちが本当に着たいと思えるものをつくっています。

普通のアパレルさんのように好みのデザインをたくさん選べるわけではありませんが、一般化された誰でも着やすいものだけになってしまうと面白くありません。

パルコ時代のつながりを活かし、ひびのこづえさんや matohu さんなど、アーティスト的な感覚を持った方と積極的にコラボレーションをしています。

東京都立産業技術センターとブラジャーを共同開発したときには、乳がんの方が「こんな楽なブラははじめて！」って言ってくださって。いろんな方と関わることで可能性の広がりを感じています。

—授乳服の単価は 6 千～1 万 5 千円程度。国内生産なのにお手頃価格ですね。

授乳用ブラジャーとセットで、1 万円から買えるように価格を設定しています。「もったいないから自分が頑張らないと。もっと苦勞しなければ」という観念がお母さんの潜在意識に刷り込まれているので、

値段が高いと買えません。「楽な方がいい。社会と繋がっていたい」と思うのは当たり前のことなのに、甘えているような気がして我慢してしまう。1万円は、粉ミルク1カ月分の値段なんです。「粉ミルク代を授乳服に当てた」って思える価格に抑えることに意味があると思っています。

——生地面積、縫う距離、工程の数を考えると、生産コストは普通の衣服より高そうです。

原価率は厳しいですが、コストより機能が優先です。授乳服は、お母さんが赤ちゃんを連れて外出しやすくするためのツール。安心して授乳できる必要があります。重なり部分の面積を減らすと胸が見えてしまうので、生地節約はできません。ボタンで留める仕組みにすると赤ちゃんが間違えて飲んでしまう可能性があり危険ですし、モタモタしていると赤ちゃんがさらに泣いてしまいます。

働き手不足解消へ 「服一枚でできる働き方改革」



産休に入る女性社員へのプレゼントとして活用する企業も

——授乳服は“子育てが楽になる変化”をもたらしてくれるのですね。

奥さんが元気だと、一生懸命ケアしなくていいのでご主人も楽です。つらい子育てが楽しくなって外に出られれば、社会活動や消費活動に早く復帰できます。

最近、「服一枚でできる働き方改革」として、社長さんや男性社員から、産休に入る女性社員に授乳服をプレゼントする企業が増えています。出産祝いに加え、復職を待っている気持ちを、授乳服を通して周りの人から女性に伝えてあげてほしいと思います。

——子どもと離れて働かないといけないのも、女性の悩みです。

このインタビューを始めたとき、オフィスの奥の方で子どもが泣きましたよね？ でも、すぐに泣き止んだ。泣いていたのは、抱っこして母乳をもらうまでの時間です。

先日、赤ちゃん連れのスタッフと東京から長野まで出張しました。高速バスで、5時間逃げ場がない状態です。でも、「大変だった？」って聞いても「全然」って答えるんです。自分の胸と身体には、どこへ行っても子どもを落ち着かせる力があるってわかっているからです。授乳服は、そのすごい力をいつでも使えるように補助してあげるツールなんです。

うちのオフィス、たくさん子どもがいるのに意外と静かでしょう？ 社会では育休を2年に延長する動きがありますが、その間まるまる休むんじゃなくて、たまには子どもを連れて仕事に出られればお母さんも企業も助かります。そういう文化を築いていければ、深刻な働き手不足も解消できるのではないのでしょうか。

妊婦用の衣服を研究してブラッシュアップ

——20年前、授乳服は市場になかったように思います。

海外製のものやマタニティパジャマを自宅に集めて研究しました。当時はそもそも授乳服というジャンルはなく、マタニティパジャマの胸に穴が開いている程度でした。しかも、胸が見えてしまったり、危険性のあるファスナーやボタンがついていたり、肌触りがごわごわだったり、不完全だったんです。いろんなパターンのサンプルで試行錯誤を重ねて、それらの問題を解消した授乳服を自分で作り始めました。

——大学で服飾を学ばれた経験が活かたのですね。

服飾と言っても、「どんな服を着たら快適か」といった衣服環境を勉強していたので、デザインというよりは人間工学的な物理学や構造研究に近いものでした。ただ、建築雑誌の編集をしていた時にも、ファッションと建築の類似性はずっと意識していました。こういった経歴だから、どの角度からも胸が見えない形状づくりに成功したのかもしれない。

ユーザーだったママたちと、手を取り合って成長



——子連れ出勤制度を大々的に取り入れられている企業はまだ多くありません。いつ始められたのですか？

創業した時ですから、1997年からです。下の子が生まれて数カ月後には販売を始めていて、その時すでに赤ちゃんと同じ空間で働いていましたね。スタッフは基本的に在宅勤務で、子どもを連れて出勤してくれることもありました。そもそも仕事という感覚があまりなかったので何の問題もありませんでしたし、みんな商材である授乳服を着て仕事をしていたこともあり、子連れ出勤はとても自然な流れで始まりました。2002年に法人化した時も、スタッフ8人の大半が子連れ出勤だったんですよ。

——どのような仕事をお願いしていたのですか？

おもに縫製やアイロンがけ、梱包・発送などの単純な業務です。企画や接客は私がやっていました。そんな中、子連れのユーザー

青山のショップをはじめ、つくば市の本社やつくばの直営店でも子連れ出勤制度を採用

さんが「手伝いたい」と言ってくれて、接客したり、イベントのお手伝いに来てくれたり、試着して意見を出してくれたりするようになっていったんです。今のスタッフは後者の業務が中心です。

——外部に縫製を依頼するようになったタイミングは？

はじめから自分では縫ってないんです。創業当時は国内の縫製工場がまだ少し残っている時代でした。仕事が減って手が空いている女性や、子どもが生まれて辞めた方をお願いしていました。工場へ小さな単位で発注するよりも、外で働けないお母さんに頼んだ方が、同じ金額でも喜んでくれるだろうし、丁寧に縫ってくれると思ったんです。

ただ、一般家庭のミシンでは縫えるものに制限がありますし、数量もだんだん増えていって。子育ての負担にならないよう自分のペースで縫ってもらっていましたから、「もっと早く縫ってください」ということは言えなくて。生産量が月50~60枚くらいになったときに、工場へお願いするようになりました。今はほぼ工場です。縫製の国内での仕事はますます減っているので、工場でも丁寧に縫ってくれていると思います。

機能性が支持されて多方面で紹介

——開発や生産で困ったことを教えてください。

それが、あんまり苦労してないんですよ。工場開拓の難しさや、金融機関が女性に融資してくれないという話はよく聞きます。私の場合は資金5千円からスタートしましたし、縫製を手伝ってくれているお母さんたちが昔勤めていた工場を紹介してくれたんです。開発の面でも、自分やスタッフを含めモニターが周りにたくさんいましたしね。

法人化の前にファッション雑誌がグッズを掲載してくれたり、ドクターや助産師が推薦してくださったおかげでだんだん認知されて、今では家庭科の教科書にも登場するようになりました。初めは誰も相手にしてくれなかったのですが、しつこく作り続けてよかったです。

——生産コストが厳しい中、どのようにやりくりされているのですか？

それはもう企業努力ですね（笑）。もっと爆発的に売れば大量生産で原価を下げられますけど、使用期間が限られているので、もともとそんなにたくさん販売できるものではありません。ですから利は薄いんです。授乳をする時期のお母さんは仕事を休んでいることが多いですし、この先どうなるかわからない不安を抱えています。だから、たとえ6千円でも「もったいない」って思ってしまう。ですので、周りの方から贈るプレゼント用の販売を伸ばしていこうとしています。

日本の女性は優秀なので、自分の努力や我慢で何とかしようと考えます。今は全然そうは見えないんですけど、「モーハウスの服を着て外に出られるようになる前は子どもと飛び降りようと思ってた」ってさざりと言う方もいます。授乳服を使えば、本当に楽になるんです。産後ケアのツールにもなりますし、産後鬱や虐待のリスク軽減になりえますから、ギフトにもおすすめしています。

多様な人種が行き交う街を、赤ちゃんと一緒に自然に歩けるように



若者や外国人など、様々な人が行き交う渋谷区から、「ナチュラルに子育てができる日本」を発信し続ける

——2005年に、渋谷区青山に実店舗をオープンされました。

独身時代に宇田川町にあるパルコ本社で働いていたので、馴染みがあったというのは大きいです。当時のパルコは女性のファッションを牽引しており、そのことも今、女性を対象に活動を続けるベースになっています。

それに、渋谷、原宿に表参道……。若い時には足を運んだけど、子どもができると行きづらくなる場所ですよ。赤ちゃんを連れて歩いて気持ちが上がるところにお店を構えたいという思いはありました。

——2014年にショップを移転された際にも、青山の地を選ばれた。

子育てと社会を混ぜてしまいたいんです。「お母さんが安心して出られる場所をつくりましょう」というのは違和感があります。いろいろな人がいる街に、お母さんが自然に出入りする

のが理想の姿です。

青山には、青山学院大学をはじめ、国際連合大学や東京ウィメンズプラザ、こどもの城などのたくさんの施設があって、さまざまな人種が集まります。ビジネスマンや海外 NPO の要人、女性リーダーに学生……。そんな混沌としたミックス感が、私の大切にしているテーマにマッチしているんです。

そういえば、先日 APEC でスピーチをした際は、モーハウスを“渋谷のお店”として紹介しました。東京の中で外国人の脳裏に強く焼きついているのは、スクランブル交差点をはじめとした渋谷の風景。やっぱり、渋谷って言うとピンとくるほど、世界的に知名度が高い街なんですね。

——子育てと社会の関わりを発信する上でも、渋谷区は他の街とは違うのでしょうか。

赤ちゃんを抱っこしたお母さんが若者で溢れた街を歩くだけでも、外国人の方に「日本はナチュラルに子育てできるんだな」という印象を持ってもらえるようです。

これまで、中国やタイ、ペルーなどを訪れて現地の方と話したことがあります。都市部も農村部も授乳と仕事の両立は難しいようで、モーハウスの話をすると「それが理想だね」と共感してくれます。子連れ出勤も“クールジャパン”なんですね。

高齢化社会の進行によって、日本は深刻な労働力不足に直面しています。子育てしながら働ける文化をつくっていくことは今一番求められていることだと思いますし、この国が衰退しないための一つの方法だと考えています。

<成功のポイント>

- 経営者自身の経験から、「外でも安心して授乳できるようにしたい」というメッセージを、服を通じて発信。
- 「授乳中の母親」に焦点を当てた、授乳服と授乳用ブラジャーのセットで「粉ミルク1ヶ月分」の客単価設定。
- 青山のショップを始め、つくば市の本社やつくばの直営店でも授乳期間中の女性スタッフを積極採用。子連れ出勤の可能性を世の中に示している。
- 「働き方改革」を求める社会の動きに合わせ、「服1枚でできる働き方改革」として、会社が産休に入る社員に授乳服をプレゼントする文化を広める。